

# 中高年配偶者死別体験者の語りから見る現代の死をめぐる経験

## Contemporary Experiences of Death: narratives of middle-aged people whose spouses died

伊藤 由里 (Yuri Ito) 指導：辻内 琢也

### 序章

死が人々から遠ざかってしまった現代において、死を前もって学ぶことは、より安全を感じながら生きるために必要であると考え、40代～50代に配偶者を失くした人々に焦点を当て、それぞれの状況の中で何を体験したのかを明らかにすることを着想した。

### 第1章

Tony Walter (1994) の論考では、モダンの死の経験は医療者による合理的な管理下で生物学的なプロセスとして捉えられることが特徴としてあること、レイトモダンの死の経験は死に逝く人や残される人の感情を医療や心理の専門家によって管理されていることが明らかにされている。またポストモダンの死の経験の特徴としては、自らの選択によって自由に死の在り方を決めて行くことであることが示されている。現代の死をめぐる状況はこれら3つの傾向が混在している。

続いて医学、心理学などの領域において、死別という経験をどのように捉えてきたかを考察した。1980年代以前は、死別による悲嘆の感情が標準化され、悲嘆の課題・段階といった症状面を重視、個人的な特異な反応は無視された。

80年代以降は、Neimeryer (2001) が指摘するように、構成主義的立場から、体験の「意味の再構成」を重視する「新しい悲嘆モデル」が見られるようになった。

### 第2章 人生と物語

ナラティブ理論によると、私達の人生と人間関係は、共同体での他者との対話や折衝、対話による意味付け行為などを経て修得した自己に関する知識や物語を基に形成される。また、自己も言葉によって構造化された時間であり物語である。さらに、自己の語り方の変容は、自己の変容と結びつき、それにともなって、過去の出来事に対する意味づけも変わっていくことが示された。

### 第3章 中高年配偶者死別体験の事例研究

本章では、筆者の配偶者死別体験についてのセルフ・エスノグラフィー、および、3人の配偶者死別体験者へのインタビューから得た語りをもとに、病いの発症時からの経

験を「始まり」「告知」「選択」「死に至る日々」「死」「その後」の6ステージに区切って考察した。その死別体験を研究対象者がどのように意味づけしていったか、死の問題という苦悩を通して、自己の在り方、夫婦の関係性のあり方を再構築する姿を考察した。また、介護する中で日常では見ることのできない喜びも発見できること、また一方で、見落としやすいケアの問題点なども明らかにした。また筆者が以前抱えていた「死」への恐怖の意味づけが変化していく過程を明らかにした。

### 第4章 事例研究と理論との関連

本章では、モダニティからポストモダニティあるいはレイトモダニティへの変化の推移という枠組みから各事例の死別体験の考察を行った。患者が医師を始めて訪れる時、彼らは「医療」による判断を求めている点で、モダニティの視点を持っている。「告知」「選択」の場面は、自身の身体の扱い方そして死のかたちを医療の判断にまかせてしまう「モダンの選択」か、あるいは死のかたちを自ら創造しようとする「ポストモダンの選択」かの二通りの道が存在する。その後、医療との様々な摩擦が時には見られるが、人々は自主的な選択によって、医療との対立ではなく、融合の経験の可能性も探っていることが示された。

また、人が死に近づくと、身体を超えた現実理解の枠組みが必要になり、「新しい物語」が生成する可能性の高いことを論じた。

### 結論

死別体験を通して、死の意味、体験の捉え方、絆の在り方などについて、それまでの枠組みを超えて新しい意味づけが再構築されていることが明らかになった。

対象者達は、かつての人々のように「大きな物語」の縛られることなく、それぞれが独自の人生という文脈の中で、その夫婦の関係性のあり方に従い、死別体験を独自の個人的な体験として捉えていることが明らかになった。

また、死別は、夫婦共同で紡がれる「物語」の終わりではなく、その夫婦の独自の絆のあり方に従い、残された者によって、語り続けられていることが示された。